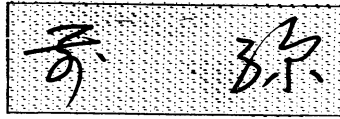


気象学的、気候学的に言うならば、世界各国各地の異常気象の実態とそのメカニズムまでをこの研究会が調べようとするのかどうかを明確にした方がよいのではないかと言うことである。地球規模で調べることは、「いわゆる地球規模」の現象がとらえられるだけであって、ひとつの国、またはひとつの地方の異常気象が——例えば日本の気象庁が日本について調べているような空間スケール、時間スケールではとらえられないことは言うまでもな

い。もし、異常気象を30年に何回という程度の時間スケールの現象とするならば、その空間スケールはおそらく地球規模より小さいものがたくさん含まれているであろうから。今後の研究に対して注文はいろいろ書いたが、とにかく短期間によくもこれだけまとめたものと思う。今後への橋渡しとして、現状は極めてよくまとめられている。今後の研究の発展を期待する次第である。

(吉野正敏)

環境 アセスメント



用語解説 (44)

近年、技術の進歩によって大規模な地形の改変や土地利用の変化、工業化による大気汚染などが発生するようになった。このような人為的な原因による環境の変化が人間生活に大きな影響を与えている。そこでこのような環境の改変を行なう場合には、事前にその影響を評価して、十分な対策をたてる必要がある。このための評価が環境アセスメントである。

したがって一口に環境アセスメントといっても、その範囲は極めて広い。単に気象の問題だけでなく、水文問題、社会問題など多種多様な問題を含んでいる。したがって環境アセスメントを行なう場合には、その対象を明確にする必要がある。たとえば問題を大気汚染に限定しても、大気汚染気象の分野だけでなく、植物や人体に対する影響もある。また汚染源の排出の問題もある。

環境アセスメントを具体的に説明するために大気汚染気象の立場からの環境アセスメントを例にとってみよ

う。ある地域にコンビナートを建設する場合の環境アセスメントの一つとして、その地域の大気汚染濃度を予測する問題がある。大気汚染濃度は汚染源の状態、つまり汚染源の位置とその高さ(分布)、と汚染質の

排出量が第一の条件であるが、それとともにその付近の気象状態すなわち風や大気の成層状態が関係している。そこでコンビナートの建設予定地域の気象状態を実際に観測をしたり、場合によっては風洞実験や水槽実験などによって把握する。また、そこに汚染源において汚染質を排出させるとどのような汚染濃度の分布になるかを、SF₆などのトレーサーを使って実測する。あるいは実測した風や気温の鉛直分布を与えて拡散式で各地の汚染濃度を計算するというようなことをして、計画段階に事前に大気汚染の予測を行なう。

以上の過程はただ説明のためにわかりやすく簡単に書いただけで、実際にアセスメントを行なう場合には、より多くの気象条件を加えて、精度の高いアセスメントを行なうことが要求されるのである。

(河村 武)